

No.	種別・名称及び員数	所有者・所在地
1	佐賀県重要文化財（工芸品） <small>いろえりゆうほうおうもんふたつきおつぼ</small> 色絵龍鳳凰文蓋付大壺 一点	[所有者] 深川製磁株式会社 [所在の場所] 西松浦郡有田町原明乙 111 番地 （深川製磁株式会社 チャイナ・オン・ザ・パーク）
<p>[指定候補とする理由]</p> <p>本作品の特色は、その大きさと壮麗な意匠にある。有田焼の大物作りの技術は江戸前期からあり、元禄時代（1688～1704）には高さが1m程の大壺が作られてヨーロッパへ盛んに輸出され、江戸末期から明治初期になるとさらに大型の花瓶や皿が作られるようになった。幕末期の積極的な近代化政策によって国内でも欧米の事情に通じた藩の一つであった佐賀藩では、万国博覧会を契機に明治の有田焼が世界で再び脚光を浴び、出品された大花瓶や大皿は欧米の観覧者たちを魅了し評価を獲得していった。</p> <p>本作品は、深川製磁の創業者である深川忠次<small>ふかがわちゆうじ</small>が制作に3年余りの年月をかけて完成させた一対の大壺のうちの1点である。忠次はこの作品を携えて明治33年（1900）の第5回パリ万国博覧会、続く明治37年（1904）のセントルイス万国博覧会に参加し、それぞれ金牌、金賞を受賞している。</p> <p>本作品は「本体」・「蓋」・「台座」からなり、さらに蓋は宝珠と冠から構成され、台座は三足である。寸法は、総高204cm、最大径67cm、蓋高54cm、台座高31.5cmである。本作品の成形は大物作りの第一人者で明治の天才ろくろ師とよばれた井手金作<small>いできんさく</small>、宝珠の龍は磁器細工の名工とうたわれた二宮都水<small>にのみやとすい</small>によるものと伝えられ、特に、大きさの割に壺の胴下部を非常に細く絞り込む点は、技術の限界まで形を追求して緊張感のある美しいフォルムを作り出しており、常識的には破綻するような造作に挑戦して見事に完成させた超絶の技法が窺える。</p> <p>色調は全体的に華やかで古伊万里様式の典型的な配色であるが、画面は蜀江文様<small>しよつこうもんよう</small>を基調として区画された幾何学文の窓の中に上絵で多くの吉祥文様が盛り込まれ、窓絵には龍、鳳凰、獅子等が表され、その背景に七宝繫ぎ文<small>しっぽうつな</small>、雷文<small>らいもん</small>、青海波文<small>せいがいは</small>等のありとあらゆる地文様<small>じもんよう</small>が施され、有田焼の伝統技法を結集した明治有田の集大成として、海外事情に精通し世界にむけて最高のものを作るという忠次の心意気が窺える作品である。</p> <p>本作品は、深川製磁創立から間もなく参加が決定した第5回パリ万国博覧会にむけて、創業者である深川忠次の指揮のもと、蓄積された有田焼の技術を惜しむことなく盛り込んで制作された明治有田焼における大物の名品である。高さが2mを超える大物でありながら技術の限界まで追求された形姿や造作、細密に施された彫刻や点描、埋め尽くされた壮麗な文様とその構成は超絶技法として明治有田磁器の集大成とよべる作品である。また、パリとセントルイスの万博にて受賞し、パリ万博では日本館の顔となるエントランスを飾るなど、世界に有田焼の名声とブランド力を高めた功績は大きく、深川忠次による欧米からの技術導入や海外市場の開拓の契機となり、明治期における有田焼の海外貿易を発展させた記念碑的作品として価値が高い。また、大物の作品でありながら完品のまま現在まで伝えられ、一般にも広く公開されている点も評価される。</p>		



色絵龍鳳凰文蓋付大壺（全景）
（総高 204cm、最大径 67cm、蓋高 54cm、台座高 31.5cm）

No.	種別・名称及び員数	所有者・所在地
	佐賀県重要文化財（考古資料） <small>に た はにわかまあと ほにわ</small> 仁田埴輪窯跡出土埴輪 一括	[所有者] 佐賀県 [所在の場所] 佐賀県文化財調査研究資料室 佐賀県神埼市鶴 3658-2
2	<p>[指定候補とする理由]</p> <p>仁田埴輪窯跡は、唐津市浜玉町谷口・湊上に所在する古墳時代中期の埴輪窯跡である。この埴輪窯跡は、遺存状態が良好で、その規模や構造を知ることができる重要な遺構として、平成 24 年に佐賀県史跡に指定した。</p> <p>今回指定対象とした埴輪 31 点は、窯跡本体（S0405）とその上面（SX401）、窯跡周辺の SK419 土坑と SX410 不明遺構からの出土品で、その内訳は、円筒埴輪 16 点、朝顔形埴輪 5 点、形象埴輪 10 点（蓋形埴輪 2 点、家形埴輪 7 点、犬形埴輪 1 点）である。</p> <p>円筒埴輪は、2 条 3 段と 3 条 4 段の大小 2 種類がある。いずれの円筒埴輪も円形の透かし孔が対角の位置に置かれる。朝顔形埴輪は、高さ 70 cm を超える大型品であり、その構成は 4 条 5 段で、円形の透かし孔が、2 段目と 4 段目に対角に一対置かれる。</p> <p>円筒埴輪及び朝顔形埴輪の外面にタタキ状の格子目文を施す円筒埴輪及び朝顔形埴輪は、九州では初めての出土であり、関東や関西の一部の出土品を除いて埴輪の外面に施されることはないことから、希少性の高いものである。</p> <p>形象埴輪には、蓋形埴輪、家形埴輪、犬形埴輪の種類が確認されている。蓋形埴輪は、立飾部及び笠部から台部にかけての破片と笠部の一部が、家形埴輪は、屋根の一部と壁体部から裾廻部分にかけての破片がある。</p> <p>入母屋（いりもや）造りの上屋根の破片には、棟木の状に鱗飾りの突起が配置され、葺き下ろされた平側には、垂木様の表現の間に網代模様が市松状に配されている。犬形埴輪は、頭部から右脚と臀部から右後脚が残り。脚部下端の形状から、犬形埴輪の中でも古い時期のものである。</p> <p>出土した埴輪の製作年代は、円筒埴輪のヨコハケの形状や突帯の間隔、口縁部や突帯の特徴から 5 世紀中頃と考えられる。</p> <p>仁田埴輪窯跡の埴輪群は 5 世紀中頃の埴輪窯（窖窯）導入初期に作られ、円筒埴輪の外面にタタキ状の格子目文が残ることから、埴輪製作に朝鮮半島系の土器製作技術の影響している。さらに形象埴輪は古墳出土品を含めても、県内では出土例が少なく、全体の形状をうかがい知ることができる資料として貴重である。</p>	



仁田埴輪窯跡出土 円筒埴輪（2条3段）



仁田埴輪窯跡出土 形象埴輪

佐賀県文化財登録候補（令和5年度）

No.	種別・名称及び員数	所有者・所在地
	佐賀県登録文化財（記念物 名勝） 岩見屋庭園	[所有者] 江口 亘子 [所在の場所] 佐賀県杵島郡江北町上小田 1371
1	<p>[登録候補とする理由]</p> <p>岩見屋庭園は、交通の要地として長崎街道の宿場町として栄えた小田宿にある岩見屋の庭園である。岩見屋は江戸時代、旅籠屋・茶屋として多くの人に利用された。鹿島藩主には、佐賀本藩との往復時に定宿（本陣）として利用されたほか、幕末から明治にかけてケンペルが元禄4年(1691)、シーボルトが文政9年(1826)、また英国初代駐日公使オールコック一行が文久元年(1861)に岩見屋に宿泊した。岩見屋の近くに脇本陣の池田屋があったが現在はなくなっている。</p> <p>庭園の造りから江戸期に作庭された池泉鑑賞式庭園で、当時の旅籠の建物は滅失しており庭園のみ現存する。作庭者は不明である。</p> <p>庭園は、山畔を利用し、下部に池泉を掘る形式である。池園は北西部の広がる扇状地の伏流水の湧き水を利用している。本庭園の池辺には滝石組が護岸を兼ねており、蓬莱島の断崖絶壁が表現され、築山中央部には阿弥陀如来、観音菩薩、勢至菩薩の阿弥陀如来三尊を表す三尊石組が見られる。また、池園の中心部には海辺の自然石を組み入れた亀島があり、亀頭石、亀手石、亀脚石、亀尾石の六石がみられ、庭園中央部には山形の羽石が立てられ、一羽の鶴が水のほとりに安らぐ様子を象徴する鶴石組となっている。</p> <p>岩見屋庭園は、鶴石組・亀石組を配した瑞祥を意味する蓬莱庭であり、江戸時代の大名庭園や町家の庭づくりでみられる不老長寿と祝儀をテーマとした庭である。江戸時代の大名庭園や町屋の庭には、庭づくりのモチーフとして不老長寿や祝儀のテーマが盛んに用いられており、岩見屋庭園もその一例であると考えられる。岩見屋は江戸時代、鹿島藩主に本陣として利用され、隣に池田屋が脇本陣として所在していた。しかし、池田屋が取り壊され、小田宿内に小田宿の歴史を伝えるものが少なくなっていることに危機感を抱いている。</p> <p>岩見屋の庭園を佐賀県の登録文化財とすることで佐賀県に残る歴史的庭園として広くPRし、長崎街道小田宿の歴史とあわせて活用することで、小田宿の歴史を語り継ぐことができると考えられる。</p>	



全景



三尊石